

巻頭言

情報社会と新たなトラブルについて

松田ひろし 日本精神神経学会財務担当理事

Hiroshi Matsuda

インターネットの原型とも呼ぶべき技術が動き始めたのが1970年代後半で、その後の技術発展は目覚ましく、これほど急速に社会を変えようとは当時誰も想像し得なかったことである。そして今や社会インフラである電話を様々な面で凌駕していると言っても過言ではない。インターネット技術は、個人の情報処理能力やコミュニケーション能力を大きくエンパワーするのであるから、それが持つ新たな問題解決の方法としての可能性に異論を唱える者はいない。

一方、このインターネットを代表とする情報技術が社会に与える影響は増大しつつあり、ただ単に今までなしえなかったコミュニケーションを可能にして我々の自由を拡大するだけでなく、社会基盤そのものをも変化させるような深い射程を持っていると言われている。

最近では、精神神経学会の各委員会のメール会議のように、わざわざ集合して会議を開催するまでもなく意見を交換することができるようになっていくが、インターネットの利便さとは裏腹に、個人情報保護などに関わる問題など様々なことが精神医学や精神医療の現場でみられるようになった。

いくつかの例を挙げてみる。公式な文書の配信と私信との区割が時につきにくく、私的な見解がいつの間にか公式な見解として採用されたり、逆に公式見解が、宛名の不備から私信として扱われてしまったりする。このようなことは謝罪し誤解を解けば済むことであるが、もっと深刻な事態が起こることもある。入院中に仲良くなった患者同士が記念のためにと携帯電話に付いているカメラ

で写真を撮り合っていたが、ある時一方の患者が無断で友人にその写真を送信してしまい、それが発覚してもう一方の患者から激しい抗議となり病院職員が仲介に入らざるを得ないこととなってしまった。また院内にある火災責任者の名前を片っ端から写真に撮り、保管し、他の患者さんに一つの話題として提供していた。また新入の職員の写真を無断で撮っていたため、スタッフより注意を行った。棟内に電話機が設置されているにも関わらず、携帯は常時必要であり通信の自由を保障すべきだとのクレームが意見箱に投函された。実習生が熱心さのあまりか、受持ちの患者に何かあったらいつでも携帯に電話していいと携帯番号を教えたところその両親の知るところとなり、一線を越えかねない行為であるので、厳重に注意してほしいと主治医に申し入れてきた。云々…。

これらはおそらく氷山の一角で、ブログやツイッターが当たり前となった現在、さらにいろいろなことが起こっているであろう。ここ5年、このようなトラブルが増加している印象を持つのは、著者だけであろうか。

情報技術が発展すればするほど、個人情報やセキュリティが犯されたり、危険にさらされたりする機会が増えているが、それらの倫理的側面の解決にはまだまだ時間がかかると思われる。我々自身も個人情報やセキュリティの取扱いにこれまで以上に気を配り、かつ、将来どのように情報社会の成熟を目指していくのか、十分に考えてみる時期にきているのではないだろうか。